

だ い あ ぐ

東京彩人記

江戸川区の小学1年生、岡本海渡君が今年1月に虐待死した事件を受け、今春、高校生や大学生らでつくるグループ「チームあさって」が「虐待防止キャンペーン」を始めた。虐待防止に向けて子どもたちの意見を聞こうとアンケートを行い、裁判を傍聴したり児童相談所を訪問したりして勉強を重ねながら、10月3日にアンケート結果を報告するシンポジウムを開いた。これら一連のキャンペーンに、スーパーバイザーとして携わった荒田直輝さん(36)にこれまでの活動を踏まえ話を聞いた。

——「あさって」誕生の経緯は？
「僕たちが何かしたい」
江戸川区で岡本君の事件が起きた時、「子ども問題には子どもに聞かなきゃ解決しないんじゃないか」と思いました。そこで、地元でネットワークを持つ市民団体「江戸川子どもおんぶず」に高校生ら若者を集めてもらい「この事件知ってる？」とか「子どもの声を社会に伝えないと事件が繰り返されると思う」という話をしたんです。そ

プレイソーシャルワーカー 荒田 直輝さん(36)



あらた・なおき 74年、京都府生まれ。99年から世田谷区内にある子どもの遊び場「プレーパーク」で6年間、常駐スタッフとして勤務。子どもたちの興味や関心を引き出すよう遊び場を整え、見守る「プレーリーダー」として活動した。現在は、子どもの権利を守るという視点から「プレイソーシャルワーカー」として、子どもや若者と社会をつなぐ活動を支援している。07年東洋大学に入学し、社会福祉学科で学んでいる。

子どもの声聞き続ける

設問は「あなたが困ったときに相談するのはどこですか？」など。メンバーも最初は数人でしたが徐々に増え約10人を超え、1023通の回答が集まりました。
——「あさって」メンバーと活動して印象的だったのは？
予想を超える行動力に驚きました。アボなしで突然、児童相談所を訪ねたり、警察博物館に行ってみたり。
それから、記述式の回答にこだわらず、子どもたちと一緒に遊びながら回答を拾うという「遊びながらピアリング」のアイデアにも感心しました。だんだん活動内容がアクティブになっていきましたね。「何かを変えたい」という思いを持ちながら表現する場がなかった子どもたちが、表現の場を見つけて生き生きしていました。
——アンケート結果で興味がある点と改めて思いました。
「相談するのはどこ？」という質問に対し、大半の回答は場所ではなく「友達」というように人だったんです。「ぬいぐるみ」「ペット」というのもありました。学校の中にある相談室などの施設を回答した人はごく少数。相談機関や施設を作る時は、どういう場所や人なら話しやすいかということと子どもたちから聞く必要があると改めて思いました。
——キャンペーンは荒田さんの今後の活動にどんな影響を与えそうですか？
今回、子どもの声の中に社会を変えていくヒントがいっぱいあると確信しました。虐待問題に限らず、環境や平和などさまざまなテーマでも同様に、子どもや若者の声を社会が受け止めることが、居心地の良い社会づくりにつながると思います。これからも子どもと社会をつなぐ活動を続けていきたいです。

記者の一言

虐待防止のため、「子どもたちの声を聞く」というのは、今までありそうでなかった活動だと思う。大人が「子どもたちのため」と思っている政策やハコもの作りなどが、大人が考えた通りの効果を発揮するとは限らず、大人の自己満足で終わる可能性もある。子どもたちを「守ってあげる対象」としてのみとらえるのではなく、社会の一員としてみることが必要だと思う。